

学校と地域を結ぶ

～学校と地域の連携を進めるノウハウ～

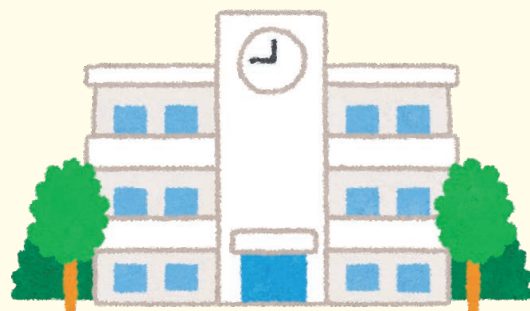


学校と地域の目指すべき連携・協働の姿

平成 27 年 12 月 21 日に中央教育審議会より出された「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について（答申）」では、これからの学校と地域の目指すべき連携・協働の姿として、次の 3 つの視点を示しています。

地域とともにある学校への転換

学校運営に地域住民や保護者等が参画することを通じて、学校・家庭・地域の関係者が目標や課題を共有し、学校の教育方針の決定や教育活動の実践に、地域のニーズを的確かつ機動的に反映させるとともに、地域ならではの創意工夫を生かした特色ある学校づくりを進めていくことが求められています。



子どもも大人も学び合い育ち合う教育体制の構築

学校と地域が連携・協働するだけでなく、子どもの育ちを軸に据えながら、地域社会にある様々な機関や団体等がつながり、また住民自らが学習することで、大人同士の絆や学びが深まります。学校との協働活動に参画する住民一人一人が学び合う場を持って、子どもの教育や地域の課題解決に関して共に学び続けていくことは、生涯学習社会の実現のためにも重要です。



学校を核とした地域づくりの推進

地方創生の観点からも、学校という場を核とした連携・協働の取組を通じて、子どもたちに地域への愛着や誇りを育み、地域の将来を担う人材の育成を図るとともに、地域住民のつながりを深め、自立した地域社会の基盤の構築・活性化を図ることが重要となっています。



これらの 3 つの視点を踏まえながら、各校における連携活動を企画し推進していくことが求められています。

地域連携によって期待される効果

①子どもたちにとって期待される効果

「生きる力」が育成されます

子どもたちの「生きる力」は、学校だけで育まれるものではなく、地域社会とのつながりや信頼できる大人との多くの関わりを通して育成されていきます。

地域への愛着が芽生えます

地域の人々に支えられて学んでいくことや、地域の文化や自然などを学ぶことを通して、地域への愛着が芽生え、地域の担い手としての自覚が育まれます。



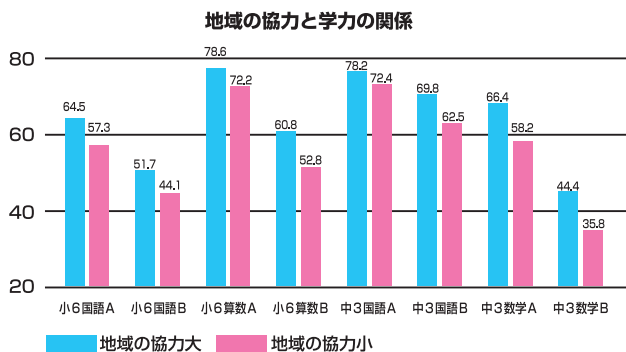
学力向上の基盤をつくります

学校に多様な人々が関わっていくことで、多くの大人の専門性や地域の力を生かした教育活動等が実施され、子どもたちの学ぶ意欲や意識が高まるなど、学力向上の基盤づくりにつながっていきます。

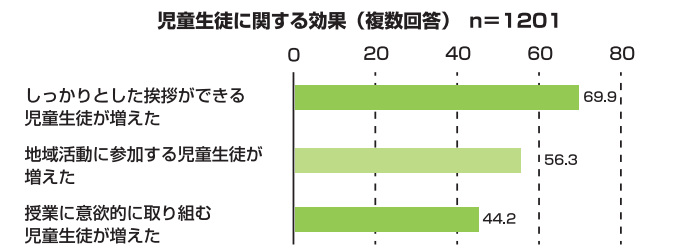
社会性が育まれます

連携活動を通して多くの地域の大人と関わることで、しっかりとした挨拶ができるようになったり、自分の意見をはっきりと言えるようになったりするなど、子どもたちのコミュニケーション能力が育まれます。

地域でのボランティア活動などは、社会の一員としての自覚につながっていきます。



国立大学法人お茶の水女子大学調査（平成26年）



栃木県総合教育センター調査（平成27年）

②教職員にとって期待される効果

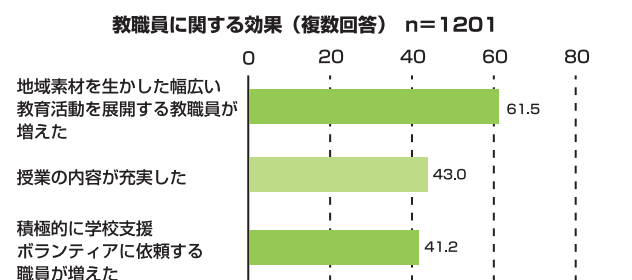
地域への理解が深まります

連携活動を通して、地域にどのような人的・物的な教育資源があるのかを知ることができるとともに、地域の人々が、学校の応援団であることを実感することができます。



授業の内容が充実します

地域の人々の専門性や地域ならではの教育資源を生かすことで、授業内容の充実を図ることができるようになります。



栃木県総合教育センター調査（平成27年）

③地域や保護者にとって期待される効果



生涯学習活動が充実します

学校支援を通して地域の大人同士がつながることにより、新たな学びへと発展することも期待できます。学校支援は学校のためだけではなく自分たちの学びの仲間づくりにもつながっていきます。

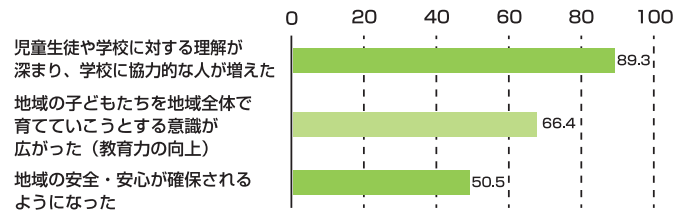
地域コミュニティが活性化します

学校支援のために集まった地域の大人が、それをきっかけとして地域活動を始めていくという例が見られます。このような、学校支援をきっかけとした地域活動の活性化は、活力ある地域コミュニティづくりにつながっていきます。

地域の教育力が向上します

多くの大人たちが、学校支援を通して子どもたちとふれあうことにより、地域の子どもたちを地域全体で育てていこうとする意識が高まり、地域の教育力の向上につながっていきます。

地域社会に関する効果（複数回答） n=1201



栃木県総合教育センター調査（平成 27 年）

④学校にとって期待される効果

教育課題が解決されます

いじめや不登校など、様々な教育課題について、学校ですべてに対処していくのではなく、地域住民だからできること、地域住民にしかできないことを、地域と役割分担しながら解決していくことができます。

地域との信頼関係が構築されます

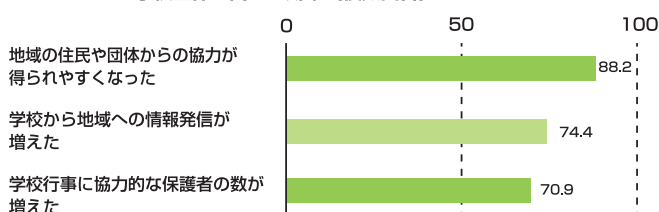
日頃から学校と地域が連携して様々な教育活動を推進していくことで、学校と地域の良好な信頼関係が構築されていきます。そして、学校と地域が相互に理解を深め、共に成功体験を重ねていくことで、地域の人々が学校の応援団になってくれます。

地域との協働につながります

地域との連携活動が進んでいくと、地域住民の学校支援活動が、参加から参画へ、協力から協働へと高まっていきます。

そして、地域とともにどのような子どもたちを育てていくのかという目標やビジョンを共有することにより、地域と一体となって子どもたちを育てていくことができます。

学校全体に関する効果（複数回答） n=1201

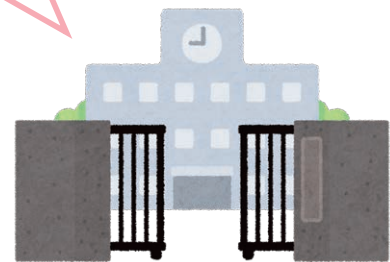


栃木県総合教育センター調査（平成 27 年）

教育課程の質が向上します

“よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る”という目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子どもたちに育む「社会に開かれた教育課程」を実現していくことが重要です。

そのためには、地域の人的・物的資源を積極的に活用して、地域との連携活動を取り入れることにより、各学校が指導要領等に基づき編成した教育課程を、より効果的に実施していくことができます。



地域連携教員の制度について

本県独自の指針を定め、平成 26 年 4 月から栃木県内の公立学校（小学校、中学校、高等学校、特別支援学校）に、地域連携教員を設置しました。

地域連携教員設置の目的

地域連携教員の設置に関する指針 第 1 目的

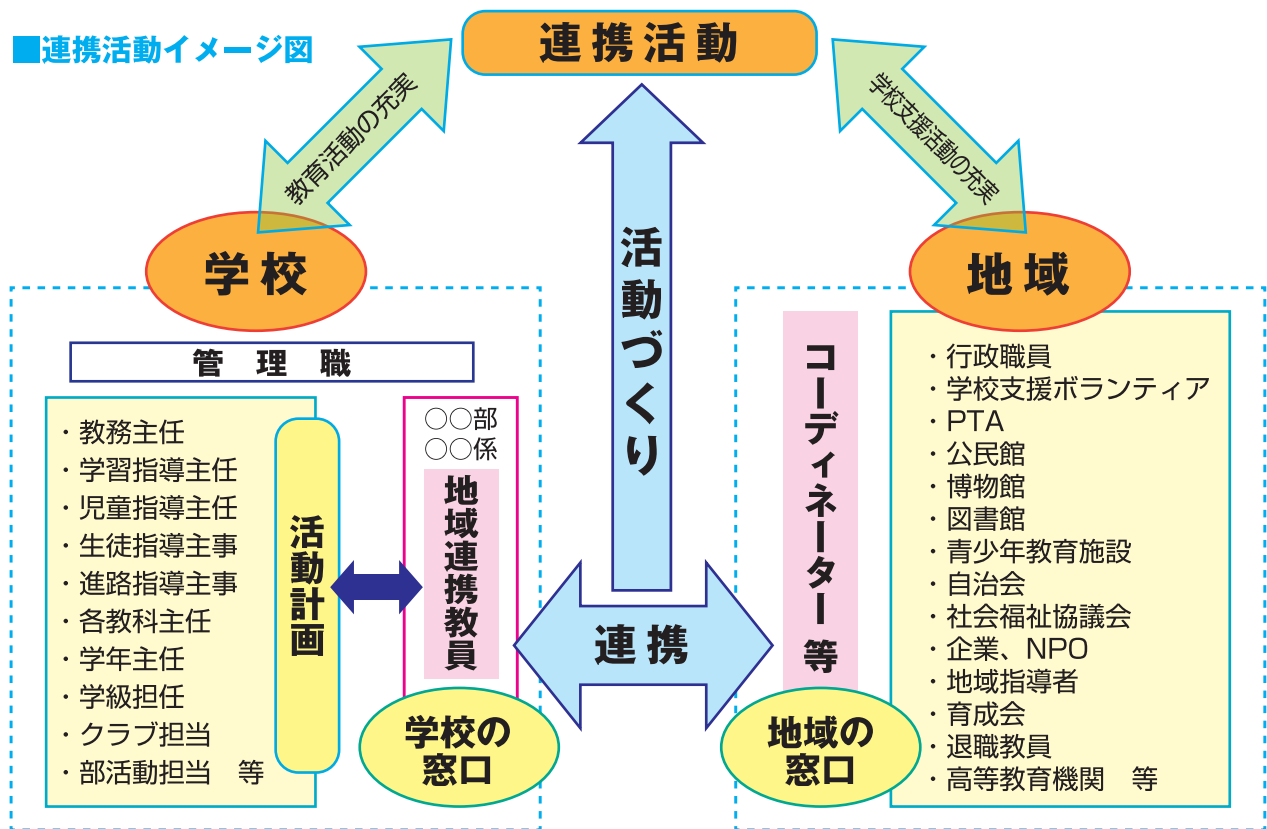
各学校に地域連携に携わる教員を「地域連携教員」として設置することにより、学校と地域が連携した教育活動を、生涯学習の視点から効果的・効率的に展開することを目的とする。

- ・ 地域連携に関する学校の窓口の明確化
- ・ 地域連携に関する校内の推進体制の整備

★児童生徒の「生きる力」の育成
★地域に根ざした特色ある学校づくりの推進

学校を核とした地域づくりにもつながる

連携活動イメージ図



中央教育審議会答申（「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」：H27.12.21 や「チームとしての学校の在り方と今後の改善の方策について」：H27.12.21）等で、学校と地域がさらに連携・協働していく重要性や地域連携を担当する教職員の明確化等教職員体制の整備等について指摘されている。

地域連携教員の活動事例

①市貝町立市貝小学校 教諭 大根田 裕一 氏

私は地域連携教員として、「地域資源や地域人材を活用した連携を進めるための校内研修」や「地域資源や地域人材を活用するための校内のニーズ調査」等を行い、教職員の連携活動に対する理解や校内の推進体制づくりを行っています。その他、特徴的なものとして次の2つの取組を紹介します。



○「地域資源（人、もの、こと）活用授業一覧」「地域連携推進により期待される効果一覧」の作成

地域の様々な教育資源の効果的な活用をめざすために、「地域資源」の洗い出しを行い、「地域資源（人、もの、こと）活用授業一覧」、「地域連携推進により期待される効果一覧」としてまとめました。これにより、児童の発達課題の解決と「育てたい児童像」の体系化、「活用する力」「生きる力」を連携活動を通して育むための視点が明らかになりました。

○学校支援ボランティア活動の事後評価

活動終了後には、ボランティアと活動内容の成果や課題、改善点等について話し合いをもったり、「ふりかえりカード」に記入してもらったりしています。それをもとに「学校支援ボランティア活動カード」にまとめ、次の活動や次年度の活動につなげられるようにしています。

②さくら市立熟田小学校 教諭 阿久井 克清 氏

私は地域連携教員として、次のような取組を行っています。

○「人材活用年間活動計画」の作成

地域連携に関する研修を現職教育に位置付け、学校職員だけでなく、さくら市教育委員会生涯学習課や「地域と学校を結ぶコーディネーター」と連携し、「人材活用年間活動計画」を作成しました。同じ場で話し合いをもったことにより、学校側だけでは気がつかないような細かな点まで共通理解を図ることができました。



○「人材活用実施計画カード」の作成

活動の継続性を高めるために「人材活用実施計画カード」を作成し、記録を累積しました。これにより、担当者や担当学年が変わっても過去の資料を参考にすることで、活動の内容の詳細を把握することができました。カードの活用とともに、写真も保存しており、さらに活動の様子が分かりやすくなっています。



③足利市立愛宕台中学校 教諭 半田 昇 氏

本校では、「自治会等へのボランティア派遣」や「ボランティア団体による防災ワークショップの実施」、「公民館主催講座への中学生ボランティアの派遣」をはじめとする、様々な連携活動を実施しています。これらの活動が円滑に、そして効果的に行われるよう、地域連携教員として次のような取組を行っています。



○「公民館職員との定期的な話し合いとつながり」

毎年年度当初に行われている「学社連携連絡会議」は、各校の「地域連携教員」と「公民館職員」との顔合わせや年間活動計画等の情報共有ができる貴重な機会となっています。この会議への出席が、地域連携について日頃から気軽に話し合える人間関係づくりの一つになっています。公民館職員の中には、社会教育主事の資格を持った職員もいるので、日頃から時間を見つけて直接、公民館で、あるいは、中学生のボランティア活動場所で話し合うこともできます。日頃からの公民館職員をはじめ各種団体の皆さんとの「人と人とのつながり」が地域連携の大切なステップになっていると思います。

④ 栃木県立宇都宮南高等学校 教諭 針谷 英子 氏

学習や部活動に忙しく、地域活動に関わる機会が減りがちである本校生徒の現状に対応するため、公開講座「宇南アカデミー」や部活動、生徒会活動等で地域における活動を体験できる場を設けています。



○関係施設との連携

本校は雀宮地域との関係が深く、雀宮地域の市民センター、宇都宮市立南図書館と連携した活動が多くなっています。関係団体の主催する祭りに参加する際には、地域連携教員が窓口となって連絡調整に当たっています。

〈宇南アカデミーにおけるコーディネートの例〉

- 1 企画立案：本校職員の専門性や生徒の興味関心を考慮して企画を立案。校外団体との連絡調整（市民センター、大学、博物館等との連携）
- 2 講師の依頼：本校職員、外部講師
- 3 広報：チラシ、ポスターの作成。チラシは雀宮地区、横川地区市民センターより地域に回覧。HPへの掲載。本校生徒・保護者への広報は一斉メールを活用。
- 4 講座の実施：本校生徒と地域住民の方が交流できる時間を設けるよう配慮。
- 5 実施後：反省および感想の共有等

⑤ 栃木県立小山北桜高等学校 主幹教諭 岩本 敏央 氏

本校の生徒たちの学んだ成果を生かして、「おやま和牛入りかんぴょうカレーパン」や「北桜御膳」を開発し、地元の大規模店舗等と連携して販売しています。また、小山商工会議所との「桑のミクスプロジェクト」においては、地元のだちょう園と連携して、生徒が開発した料理の商品化を目指しています。



北桜御膳



だちょう園との連携



開発した「みそチキン」



〈商品化までの地域連携の流れ〉

- 1 商品開発：学科の特性を生かした地域資源を活用した商品開発を行いました。
- 2 市場調査及び技術指導：小山市の道の駅や栃木銀行等の協力により市場調査（顧客ニーズ）を行ったり、地元の日本料理人のアドバイスをいただいたりしました。
- 3 協力業者の発掘：協力事業所の発掘を試みましたが、適当な業者が見つからず、これまでの商品開発で培ったネットワークを活用して、商品化の目処が立ちました。
- 4 販路の開拓：小山商工会議所で開かれた小山市の大規模店舗会議において、商品のプレゼンの機会をいただき、開発した商品の販路を開拓することができました。

⑥ 栃木県立那須特別支援学校 教諭 大谷津 修司 氏

本校では、ボランティアスクールや地域交流活動等、様々な連携活動を実施しています。特に地域交流活動については、近隣の公民館と連携しながら、公民館が主催する「コミュニティまつり」に生徒が参加し、地域住民や近隣小中学生との交流を深めています。

○コミュニティまつりへの参加

近隣公民館等と連携して実施した「大山コミュニティまつり」における地域連携教員としての取組を以下に示します。



	内 容	地域連携教員の動き
事 前	大山公民館総会	・年間参加活動計画の確認 ①大山コミュニティまつり②「大山ふれ愛・花いっぱい」事業交流会③高齢者部会への学校公開、なとく祭
	年間行事打合せ (大山コミュニティまつり打合せ)	・大山公民館職員と行事内容の打合せ ①プログラム確認②参加生徒の確認③活動内容の確認④作品・製品の展示の実施
	当日に向けての準備	①チラシの掲示②参加生徒への連絡通知書の配布③作品・製品の展示準備と展示
当 日	大山コミュニティまつり 参加者：大山地区住民、大山小学校、西那須野中学校、那須特別支援学校	①プログラムの確認②引率教員・公民館職員との連絡調整③参加生徒への連絡調整 ④作品・製品の運搬⑤作品・製品の展示⑥控入室準備⑦昼食券配布等
事 後	広報と反省	①地域連携ニュースへの掲載②来年度の参加への検討

発達段階による連携活動及び「地域」の捉え方の違い

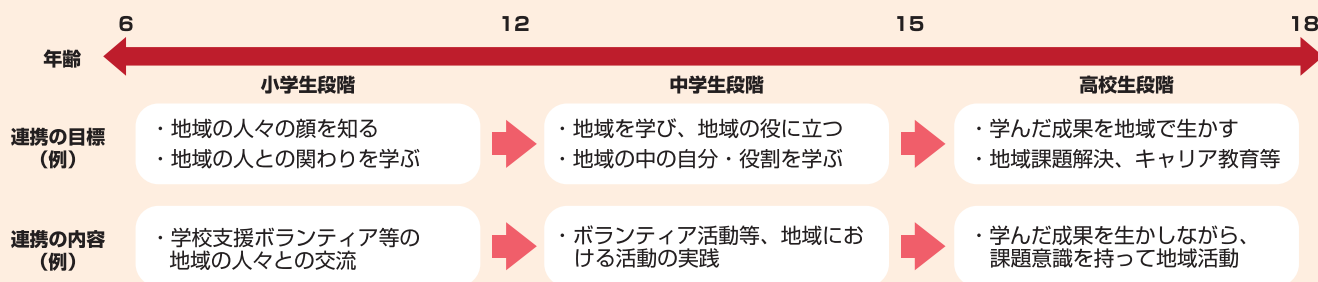
① 発達段階による連携活動の目安

地域との連携活動を企画する際に、何をどこまで実施すれば良いのか、「地域」をどう捉えれば良いのか迷うことがあると思います。

連携活動はあくまで手段であり、その目的は子どもたちの教育活動の充実にあります。したがって、求められる連携活動の内容は、発達段階によって必然的に違ったものになっていきます。連携活動の目標をきちんと捉えて企画することが大切です。

まず、小学生段階は学校支援ボランティア等の地域の人との交流を通して、地域の人々の顔を知る、地域の人々との関わりを学ぶことが主な目標となります。そして、中学生段階では、ボランティア活動等を通して地域を学び、地域の役に立つ体験をすることで、地域の中の自分・役割を学ぶことが主な目標となるでしょう。さらに、高校生段階では、小・中学校の連携活動の経験を基盤として、様々な活動で学んだ成果を生かしながら、地域課題の解決やキャリア教育等の視点から、課題意識を持って地域の人々と「協働」することが目標となっていきます。

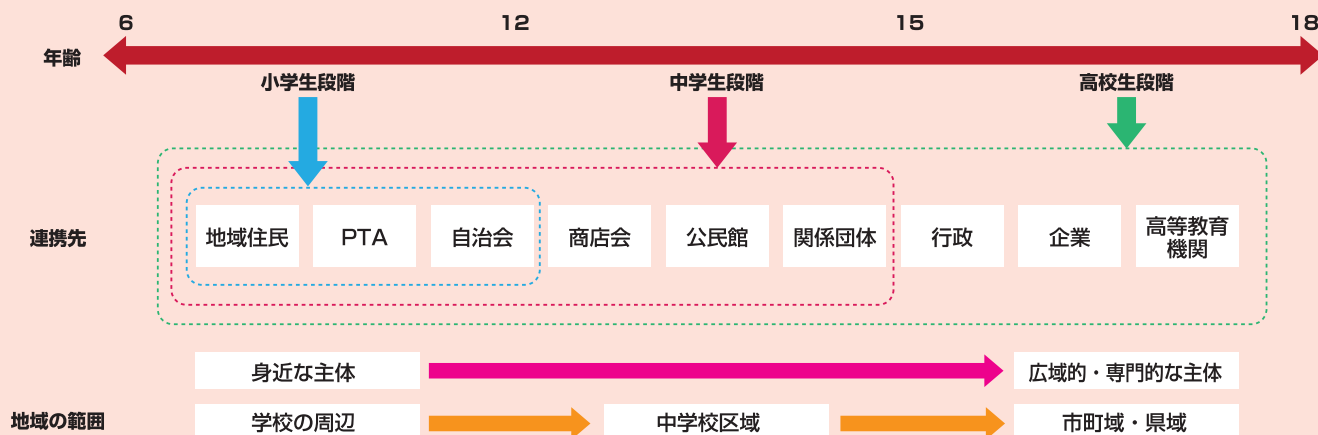
下の図に示すように、発達段階ごとに地域との連携活動を積み重ねることが、子どもたちの「生きる力」の基盤を作っていくことにつながります。各学校が発達の段階を踏まえながら、目標を明確にした上で連携活動の内容を考えていくことが重要です。



② 発達段階による「地域」の捉え方

各発達段階における連携活動の目標から考えると、小学生段階では地域の人々との交流として、学校支援ボランティア等の地域住民と接する機会が柱となることから、「地域住民」や「PTA」「自治会」等の学校周辺のエリアが「地域」となります。また、中学生段階ではボランティア活動等で生徒が地域に出て行く活動が多くなることから、「商店会」「公民館」「関係団体」等の近隣の地域以外も「地域」として捉えていく必要があります。

一方、高校生段階では、生徒の課題意識に応じて、「行政」や「企業」「高等教育機関」等、広く連携先を求めていく必要があることから、「地域」の概念はさらに広域になり、場合によっては市町域・県域と捉えていくこともあります。下の図は発達段階による連携先と「地域」の捉え方を図示したものです。



地域連携教員の職務と活動状況について

地域連携教員の職務

地域連携教員の職務については、学校経営方針を踏まえながら各学校の状況に応じて校内で十分に検討するとともに、校内の体制を整え学校全体で計画的に進めていきましょう。

1 学校と地域が連携した取組の総合調整に関すること【総合調整】

- 地域連携に関する計画の作成及び見直し
- 地域連携に関する校内研修の企画・運営 等

2 学校と地域が連携した取組の連絡調整や情報収集・発信に関すること【連絡調整や情報収集・発信】

- 地域連携に関する活動の連絡調整
- 地域連携に関する情報収集・発信 等

3 学校と地域が連携した取組の充実に関すること【取組の充実】

- 地域連携に関する活動の実践
- 地域連携に関する活動への支援
- 計画や活動についての評価 等

地域連携教員の活動状況

○地域連携教員として担っている業務

地域連携教員が担っている業務としては、上記の職務に沿って、「計画の作成・見直し」「連絡調整」「情報収集・発信」等が多くなっており、学校全体の連携活動に関する総合調整や連絡調整等を行っています。一方で、「計画や活動の評価」や「校内研修の企画・運営」については、他と比べて低くなっており、今後の取組が期待されます。

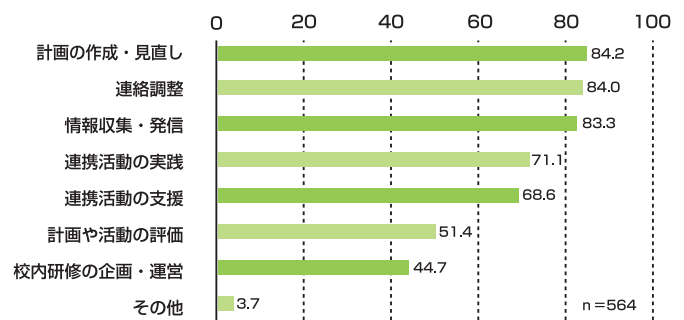
○地域連携教員の設置の重要性

地域連携教員は様々な業務に取り組んでいますが、「地域連携教員の設置に『重要性』を感じるか」という問いに対しては、「とても感じる(38.5%)」、「少し感じる(48.4%)」と、約9割の地域連携教員が設置の重要性を感じています。

○地域連携教員の設置による他の教員の負担

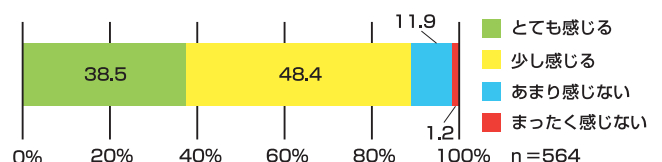
「地域連携教員の設置により他の教員の地域連携に関する負担が減ったか」という問いに対しては、「減少した(10.7%)」、「やや減少した(41.1%)」と、約半数の地域連携教員が他の教員の地域連携に関する負担が減少したと実感しています。

地域連携教員として担っている業務（複数回答）



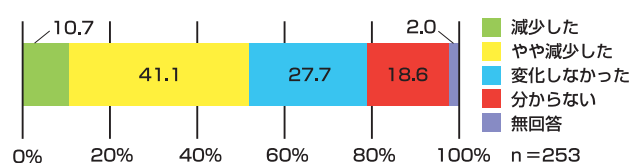
栃木県総合教育センター調査（平成 28 年）

地域連携教員の設置に「重要性」を感じるか



栃木県総合教育センター調査（平成 28 年）

地域連携教員の設置により他の教員の地域連携に関する負担が減ったか



国立教育政策研究所社会教育実践研究センター調査（平成 28 年）